

2023

6

# ナイル

現代短歌ナイル

【今月の歌】

小村井敏子、福田生  
松本豊子、鈴木鳳介

\*\*\*

ナイルキャンパス／五代目神田伯梅

\*\*\*

4月号作品批評／宮本史一(心の花)

\*\*\*

真実は隠せない／多羅空岳  
母になる／二方久文

# NILE CAMPUS

288

伯梅閑話 — 京都の寄席富貴 —

小村井敏子（五代目神田伯梅）

六代目神田伯龍が、四代目神田伯治になった昭和二十二年の九月ごろのことだった。京都の富貴という寄席の席亭、横田に買われて（出演依頼されて）、十日の約束で（寄席はワンクール十日だ）、京都へ行った。席亭に気に入られて、次の十日は富貴で、そのあとは、浜松の浜松座へ行ったり、富貴と西陣の京山座との掛け持ちをするなどして、合計四十日になった。

夜は、舞鶴から来た引揚者が本願寺にいたので、慰問に駆り出された。若手は高座に上がる時間が早いので、毎晩のように慰問に行った。この慰問に来ていたのが、上方落語の復興に力を尽くし、人間国宝になった、三代目桂米朝（かつら べいちよう）や小南陵時代の三代目旭堂南陵（きよくどう なんりよう）だった。給金はなし。その代わりに一回行くとたびに、市電の回数券を一冊くれる。伯治には用のない回数券だ。万年前座の桂團治にあげて喜ばれた。この團治が「楽屋で祝儀を切ると良い」と教えてくれたので楽屋で祝儀を切った（配った）。楽屋での顔（立場）がよくなった。

師匠と弟子が共演するのを親子会と言う。富貴での次の十日は、表向き親子会と言わなかったが、五代目伯龍と伯治、二代目桂春團治と桂小春（三代目桂春團治）、花月亭九里丸と西条凡児。そして、別看板で、三代目三遊亭金馬と九代目柳家小三治（五代目柳家小さん）。（伯龍はそう記憶していたが、まだ、前名の柳家小きんだったようだ）だった。小三治の「青菜」を高座の袖で聞いていた春團治が、

「こいつは何や。生意気なガキや」と言ったのを、伯治は聞いている。「青菜」は、春團治の得意ネタだったのだ。（ナイル2005年5月号）

